

令和3年度 第2回尾瀬・日光国立公園ニホンジカ対策広域協議会

議事概要

日時：令和4年2月25日（金）9：00～12：00

会場：ウェブ会議システム「Webex」

■総合司会 （株）野生動物保護管理事務所 奥村取締役

■事務局挨拶：関東地方環境事務所 柴田次長

以前は一同に対面で実施してきたが、近年のコロナウィルス拡大に際し、今回もオンラインで対応している。今後もこのような方針になるのかもしれない。本日は、各地区・各公園での重点方針に基づいたシカ対策の取り組みを報告し、次の年の実施内容についての意見交換を予定している。有識者には、各地区の課題に応じて専門の見地からコメントを頂けたらと思う。例年同様、全体の会議を前半に行い、後半は地域に分かれての意見交換会を設定している。このように関係者が集まる機会も少ないので有意義な会議になればと思う。

■議事：進行 （株）野生動物保護管理事務所 奥村取締役

(1) 2021(令和3)年度重点方針評価及び地域別意見交換のテーマについて

(2) 2022(令和4)年度の取組について

(3) 地域別意見交換

－群馬：1 薄明薄暮の捕獲

2 笠ヶ岳及び泉水田代における柵設置の検討

－栃木：鬼怒沼の現状共有と防護方法の検討

－福島：1 帝釈山・田代山周辺での対策

2 大江湿原の柵の維持管理

(1) 2021(令和3)年度重点方針評価及び地域別意見交換のテーマについて

■有識者からのコメント

○谷本名誉教授

これまでシカの移動経路やカメラデータなど多くのデータが取られているが、それらが捕獲や保護対策に有効に使われているか、リンクしているかについての全体的な考察が必要である。多くの捕獲があるにもかかわらず、現状シカの被害はあまり変化していない印象がある。ある場所でイワナが釣り上げられると次に別のイワナが来る、というようなことがシカにもあるとすると、尾瀬はシカにとって大変重要な場所である可能性がある。そういった観点の調査も加えてもらいたいと感じる。植物の被害は拡大し、奥地のほうまで来ている。現場と各行政機関が連携して、この協議会を有効に利用した進め方を検討してほしい。

○大森主幹

全体的に被害の及ぶ範囲が拡大しており、モニタリングや防除対策をするのに困難な地域まで広がってきている。調査をする人数も限られているので、ICT、民間人、SNSなどを活用し、包囲網を広げて情報収集すべき。また、シカをそのような場所に行かせない、留まらせないことは大事なことであるが、ある個体がいなくなっても次の個体が入ってくるような堂々巡りは、ある程度の覚悟のうえで、対策に取り組むべきと感じる。シカ柵にしても継続的な捕獲にしても、事業を立ち上げるよりも維持・継続していくことが難しい。特に初年度は予算が付きやすいものの、その後は予算が年々少なくなっていく点も考慮する必要がある。

○奥田准教授

この広域協議会を立ち上げたメリットを再確認し、どのようなデータが取得できる体制ができているのか、それによってどのようなメリットを生み出すことができるのか考えたうえでこれからの対策を行っていく必要がある。継続すべきところと新たに対策を実施しなくてはならないところが、この協議会を通じて見えてきていると思う。この協議会がこれまでのデータの蓄積を利用して対策を円滑に進めるためのプラットフォームになればと思う。

■質疑応答

・重点方針評価シートの中の数字・アルファベットに関して、令和3年度の重点方針毎に番号をふっている。

(日→日光、尾→尾瀬、共→その他共通、C→捕獲、M→モニタリング、F→植生保護柵関係)

数字はそれぞれの項目ごとに連番でつけている。令和4年度のシートで番号が同じものは前年度と全く同じ内容のもの、" が付いているのは前年から内容が少し変化したもの。

・尾瀬におけるイノシシの痕跡やセンサーカメラの撮影頭数は近年増加している印象があり、個体数の増加、生息地の拡大が懸念される。環境省事業では、捕獲期間中に尾瀬内でイノシシが確認されれば捕獲出来る体制を整えてつつあるものの、イノシシを主目的とした調査や捕獲は現状行われていない。日光でもイノシシによってシカ柵が壊されている事例が起きている。今後は、得られたイノシシの痕跡やセンサーカメラのデータをしっかりと記録していく必要がある。

(2) 2022(令和4)年度 of 取組について

【グーグルマイマップにおけるデータ共有に関して】

■質疑応答

・視覚的で非常にわかりやすいという意見が出た。

シカの移動経路のデータはどの程度の量(何年分)を地図上に載せるのか、レイヤ分けの際にどのようなデータでレイヤを作成するのかについてなど、データの詳細や表示方法等の運用上のルールについては今後検討していく必要がある。

(3) 地域別意見交換

■群馬グループ

【テーマ1：尾瀬における薄明薄暮の捕獲】

尾瀬における今後の捕獲数を増加させるための提案として、既存の技術の延長で行える薄暮帯での捕獲を提案する。R5の実施を目指し、捕獲の歴史が最も長い尾瀬ヶ原の群馬県域での実現可能性を討論・検討した。

○議論

・GPS 首輪の軌跡が多い所ではなく群馬県域で捕獲を行う理由については、群馬県域ではGPS 首

輪の装着頭数が少ないだけで、多数のシカが夜間の湿原に出没することが確認されているためである。

- ・土地立入・作業許可については本協議会で同意が取れていることが条件となる。
- ・視認性は場所（林内か湿原か）や季節によって異なるため、日没からの経過時間ではなく、明るさを指標として設定することも検討する必要がある。
- ・シカとカモシカとの誤射の懸念に関しては、現場において日中と同等の視認性、安全性が確保できているかどうかが重要である。
- ・捕獲後の処理について、日没 30 分後に捕獲した場合、真っ暗になってからの処理は課題である。場合によってはその日ではなく翌日に処理を行うことも考えており、これは現場で実際に検証する必要がある。
- ・夜間銃猟は基本的に厳格な安全管理が可能であると判断した場合に限定的に許可できる。関係者を含めた入山者の安全の確保や、他の調査や事業で尾瀬に入る人に対する捕獲期間などの情報共有を徹底する必要がある。
- ・認定事業者は日本中にかなりの数があるが、その中で夜間銃猟ができるのは 1～2 割である。WMO では夜間銃猟の資格を持っている者は 7～8 人程度で、尾瀬にきて実際に捕獲を行う者はさらに絞る予定である。
- ・一般の人や業者の人が夜間にいる可能性はあるため、人がいてもおかしくないという前提で従事していくべきである。

【テーマ 2：笠ヶ岳及び泉水田代における柵設置の検討】

群馬県は優先防護エリアのうち笠ヶ岳及び泉水田代の 2 地点の対策ができていない。これらのエリアについて、状況の把握と問題点を洗い出し、柵設置についての討論・検討を行った。

1) 笠ヶ岳

- ・笠ヶ岳は高山植物や希少種が豊富であり、雪原が発達しイワイチョウの群落がある点、尾瀬の他の場所にはない環境が集中しているエリアであるという点において重要である。
- ・花畑の南東斜面で攪乱地が拡大している。しかし、アクセスが困難な地域であり、また岩が多く柵設置に工夫が必要である。
- ・ヘリコプターの利用に関して、資材の運搬は申請をすれば可能であるが、人の運搬については着陸許可が問題である。
- ・許認可に関して、自然公園法についてはシカの対策という名目で柵設置をするのであれば、生態系維持回復事業を申請してもらい、その範囲内で設置を行うのがスムーズである。笠ヶ岳は県の自然環境保全地域になっており、幕営あるいはアクセス道路などを作る場合は群馬県自然環境保護条例に伴う申請が必要になる。

2) 泉水田代

- ・泉水田代は、尾瀬ヶ原で最大の湧水池である点、クロバナロウゲの本州での最大の群落である点において貴重である。現在ではシカの影響で断片化、縮小化しているが、いま保護すれば一定の回復が可能である。
- ・アクセスの困難さ、融雪期の増水など、場所的な課題、時期的な課題は考慮の必要がある。
- ・柵の見回りに関して、春設置したとして、夏の見回りをなにかと抱き合わせられないかという意見が出た。ドローンでの省力化の提案もあるが、現地で目視する必要もあるので組み合わせが必要。また、泉水田代についてもヘリでの搬入は可能である。

3) 環境省からの提案

- ・柵を所有者だけの負担にするのではなく、協議会として協力体制を構築していけたらよい。まずは構成員の群馬地域の皆さんで現地視察にいければと思う。泉水田代はイラクサの状況から 6

月より手前、笠ヶ岳は7月以降でいいと感じるが、実際に現地を視察して、今後につなげていきたい。

■ 栃木グループ

【テーマ1：植生保護についての情報共有】

- ・ 鬼怒沼の植生の現状や防護柵についての基礎知識などの情報共有を行った。
- ・ 植生保護柵の事例紹介として、環境省から戦場ヶ原および小田代ヶ原、日光森林管理署より奥日光、県西環境森林事務所より白根山・五色沼、テンドリルより尾瀬ヶ原について、それぞれ柵の種類、設置方法、巡視、現状の植生被害状況などの紹介があった。
- ・ 資金や労力を確保する取り組みとして、全国のユニークな事例の紹介があった。

【テーマ2：鬼怒沼の植生保護について語り合おう】

鬼怒沼の植生保護について、2つのグループに分かれて自由にアイデアを出し合い、グループごとに植生保護に向けたプランの発表を行った。

○Aグループ 「みんなで守る天空の楽園～日本一高い湿原～」

鬼怒沼は日本一の標高にある非常に貴重な湿原であるが、裸地化するとすぐに乾燥しやすい状況にあるため、いまが守る最後のチャンスであるという危機感を抱いている。シカ柵は全体を囲うべきという意見が多くある一方、現実的にはパッチディフェンスとなってしまう。しかし、観光客など訪れる人にとってパッチディフェンスは景観が損なわれることがあるため、やはりシカ柵は全周を第一に考えたい。また、場合によって一年中設置できる柵がほしい。

地元の小学生は遠足で登る機会があるそうで、子供たちにも手伝ってもらうような体制や、奥鬼怒4湯といった経営している人たちの協力を得てもいいのではという意見も挙げられた。以前はサブレンジャーという、大学生を夏の間のみ雇っていたこともあり、それを復活させ、若くて力強い人たちが柵の設置撤去を進めていく提案もあった。また、柵の設置と同時に緊急的に捕獲も進めていくべきと意見があった。

○Bグループ 「OKUKINU リバイバルプラン！」

グループの主題となったのは、柵を全体で囲うのか、または対象種を限定し部分的に囲うのか、といった防護の仕方であった。理想としては奥鬼怒湿原の全域を植生保護柵で囲いたい。また、ネックとなる労力や資金面をどのように調達するのか意見があった。まず、資金面では、宿泊税などの法定目的税などで自然環境保全のための税金を観光客などから調達する。維持管理の面では、観光客の SNS を活用して柵の状況のデータ収集を行ったり、東京電力に柵の点検を委託したりするなど、はどうかと意見が挙げられた。

○谷本名誉教授からのコメント

生物種の多様性を維持するためにも柵は緊急に設置しなければならないことは、シカが生息していれば全国どこでも同じことが言える。個体数削減を待っていては全くなくなってしまうことは20年間の調査で把握している。今後は、教育機関との連携や地元との連携、また関心ある人々の共通認識としていかなければならないと感じる。

また、自然現象は現場からみた人たちから得たデータを重視していかなければならないが、今回、協議会に出席しているのはほとんど行政機関が多く、直接現地で作業している人や現場の参加者が少ない。また、同じ人が経年的に見てくれる制度でもないため、協議会含めもう一度検討していただくべきと考える。

■福島グループ

【テーマ1：帝釈山・田代山周辺での対策】

R2～R3年度に行われたセンサーカメラ調査により、帝釈山・田代山周辺では春先から夏にかけてシカの撮影頻度が高くなっていることが報告された。福島県はR4年度秋季に田代山北側エリアにて、くくりわなによる捕獲事業を予定している。テーマ1では、2つの論点（①捕獲の実施体制、時期、場所に関して②協議会としてできる対策に関して）に沿って、各関係機関で意見交換を行った。

- ・植生被害状況に関して、7月末の調査の時点でかなりの食痕が見られ、年々増えている傾向がある。山頂湿原でもキンコウカ、コバイケイソウなど尾瀬ヶ原では忌避されているものが食べられている。
- ・捕獲時期については、データをみると春先が望ましいのでできる限り早い時期のほうが捕獲効率は上がるだろう。今回の捕獲事業では広域に仕掛けるとなるとどのくらいの時間がかかるのか、集中的にした場合はどうかなどのデータを取り、将来的には春先での捕獲ができるような事業体制を整えていく。カメラに関しても、設置箇所をある程度分散させたいので、時期・雌雄別の撮影頻度などの情報を取得していくべき。
- ・設置時期、場所に関しては事前に相談し、時間的な余裕をもって調整したい。
- ・国有林内に捕獲範囲を広げた場合については、適切に手続きがなされれば協議の上、対応したい。
- ・捕獲場所に関して、山域全体として捕獲は見込めるが、捕獲努力のことを考えるとエリアを広げるのは難しい。また、猟友会が捕獲をしているところとの棲み分けが重要。
- ・これまでの尾瀬での情報を活用し、田代山の湿原がどのような状況にあるのかを想定しつつ、守るべき方向に道筋を立てていくべきである。

【テーマ2：大江湿原の柵の維持管理】

大江湿原に設置してある柵は、残雪が多い箇所もあり越冬後の設置の時期が遅くなってしまうという課題がある。融雪の時期や状況が毎年異なっており、効果的な設置を行うためには関係機関と連携し、状況に応じた速やかな対応が必要である。テーマ2では、尾瀬ヶ原における柵の越冬方法の事例を参考に、大江湿原における柵の維持管理について2つの論点（①越冬方法、越冬場所の検討②協議会としてできる対策に関して）について、関係機関で意見交換を行った。

- ・現状の柵は金網の防護柵を使っているため、運搬や雪中からの資材の掘り出しに非常に労力を必要とする。また、雪が解けている所から設置しても、設置時期の時間差が生まれてしまい、柵を完全に設置することは難しい。
- ・設置・撤去に関して、以前はボランティアでやっていたが、コロナの状況で人員確保が難しい。融雪前に設置すると、融雪後の手直しの作業にも人員が必要になる。
- ・柵の設置のタイミングがどうしても遅くなってしまうなら、柵内に入ったシカをどう排除するのかについての議論をした方が早い可能性もある。
- ・柵の管理は地元で回していくのが望ましいが、外部の助力も重要。学会や地元の大学などで若手の学生を活用していく。ただ、そういったところに頼り切ってしまうと途切れた時に困るので、地元ベースで取り組んでいくべきである。
- ・春先にどれだけ早く柵を設置できるかというのは難しいところがある。改善案として現実的なのは、資材をどこかにまとめておいて、雪が残っているタイミングで掘り出し、設置する方法か。ただ、掘り出したとしても雪が残っている状態で設置するという問題は残ってしまう。

以上